

9. 貝類

【選定・評価方法の概要】

1998 年版では小笠原諸島の貝類のみが対象とされ、伊豆諸島は対象外であった。伊豆諸島と小笠原諸島に分布する貝類として約 2,000 種弱が報告されており（西村和久, 1999. 東京水試調査研究報告, (211). ; 湊宏, 1988. 日本陸産貝類総目録. 他）、微小な種の確認やその再検討によりまだ種数は増加すると考えられるが、特に陸産種では貝類相はほぼ把握されているといえる。貝類では、今回の対象とした生息場所の範囲は、ほぼ環境省に準拠して、基本は陸域・陸水域である。ただ、陸水域には幼生が海域に出た後、淡水域に戻ってくる両側回遊^{*1}する種も含まれている。わずかではあるが小笠原諸島では、主に内湾域の潮間帯^{*2}に生息する種も対象とした。これらの生息域に見られる種は、伊豆諸島で 87 種、小笠原諸島で 130 種（いずれも亜種を個別にカウントした。以下同じ。）となり、そのうち伊豆諸島では 47 種を、小笠原諸島では 97 種を検討対象種とした。研究中で種小名の確定していない種（未記載種：リスト中には sp. で表記した）も、認識された種であるので対象に含めた。今回の対象年代は、明治期以降とした。

伊豆諸島の分布記録は比較的多いが、生息密度変化を具体的に示すデータはほぼ皆無であった。小笠原諸島では、1990 年代以降の密度変化を示すデータは存在するものの、一部の島しょと分類群に限定されており、対象種全体を同じ精度で評価・表記することは不可能であった。そのため、評価は定性的要件に基づき、CR（絶滅危惧ⅠA 類）と EN（絶滅危惧ⅠB 類）とを区別しなかった。

なお、貝類の分類体系は、高次分類群の取り扱いが研究者等により異なっており、目名は学術用語集に準拠した。

【選定・評価結果の概要】

<伊豆諸島>

本諸島の貝類は 1998 年版では対象となっていなかったが、今回、検討の結果、40 種が掲載された。環境省版レッドリストの 2006 年改訂版で、DD（情報不足）として多数の微小なベッコウマイマイ科の種が新規掲載され、今回これに準拠し、この科が多い傾向となった。ランクとしては、CR+EN（絶滅危惧Ⅰ類）5 種、VU（絶滅危惧Ⅱ類）8 種、NT（準絶滅危惧）13 種、DD（情報不足）8 種、留意種 6 種となり、NT が多いものの、比較的各ランクの割合は近似していた。CR+EN には、八丈島に生息する固有種を含む陸産貝類が多く含まれることになった。八丈島では、近年の南九州や奄美諸島等からの外来生物が多く記録されている。一部には、このような外来生物による攪乱が陸産貝類減少の要因とも考えられるが、外来生物が記録される前から、屋敷林等に生息していたキセルガイ類等の激減が観察されており、各種の薬剤散布が一因ではないかと想定されている。このように、島内の広範囲な環境で一部の種の個体数減少が確認されている。八丈島以外のいくつかの島しょでも、密度低下のレベルは低いものの、陸産貝類個体数の減少が認められている。現在では無人島となっている

八丈小島には、複数の掲載種が生存している。この島では、林床の改変により陸産貝類の生存を脅かすノヤギ（野生化したヤギ）の駆除事業が成功し、掲載種の継続的な生存可能性が高くなっている。鳥島からは分布北限となる数種が知られており、小面積の島の環境は激変しやすいと考え、これらの種を留意種として掲載した。

伊豆諸島の各島では自然度の高い地域が自然公園等に指定され、法的な規制がかかっている。これらの地域で移動能力の低い陸産貝類は生存できている。社寺林や人為的攪乱の極めて少ない海岸崖地等からも掲載種が確認されている。

伊豆諸島は火山島であり、河川・干潟の発達が良くなく、これらの環境に生息する種はわずかにしか記録されていない。両側回遊する種のうち、定着と想定される種を掲載した。

<小笠原諸島>

本諸島の貝類では陸産種を中心として 1998 年版で 78 種が掲載され、今回 86 種を掲載した。種数の相違は、前回より対象年代を新しくしたため、明治期以前に絶滅したことが確実な 3 種を除き、環境省版レッドリストの 2006 年版以降に記載された種や未記載ながら極めて絶滅の可能性の高い弟島のカタマイマイ属の一種を含め、さらに両側回遊する種を対象としたためである。ランクとしては、EX（絶滅）24 種、CR+EN（絶滅危惧Ⅰ類）33 種、VU（絶滅危惧Ⅱ類）18 種、NT（準絶滅危惧）4 種、DD（情報不足）5 種、留意種 2 種となり、掲載種の約 1/4 が絶滅種であり、絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類も約 6 割にも達している。これは、極めて固有性の高い本諸島の陸産貝類は明治期に詳細に調査され、諸島内で適応放散したいくつもの分類群が記載されており、小面積の各島が太平洋戦争以前に森林伐採を中心とした極めて強い人為的変革を受けていたことによる結果である。また聳島列島を中心にノヤギによる植生破壊も陸産貝類の激減をもたらしている要因の一つである。このようなノヤギや同じく陸産貝類の生存に影響する弟島のブタの駆除事業でも成果が上がっており、絶滅回避に貢献している。前回のリストで絶滅とされた数種が、近年母島のこれまで未調査であった小面積の地域から再発見されたが、このように散在してわずかに残存している良好な地域に掲載種の大部分が分布している。特に人為的改変の少ない兄島には多くの掲載種が比較的高密度で生息している。本諸島では、外来種のニューギニアヤリガタリクウズムシによる固有陸産貝類の捕食による激減が現在も進行中である。前述の野生化した哺乳類の駆除事業等と共に、リクウズムシを含め外来生物の諸島への持ち込み・島間の分散阻止等、様々な方面から多大な努力が払われている。

汽水産・海産種では、父島大村湾のような遮蔽された海域に生息する固有種のオガサワラスガイで減少が著しく、同湾奥部の小面積の干潟からもいくつかの掲載種が知られている。両側回遊する種は、今回の検討の結果、定着している、あるいは幼生加入が継続的に行われていると判断した種は少なく、ほとんど掲載しなかった。ただ、父島八瀬川の河口域等では、ブタハマチグサ等の掲載種が生息する特異な環境である。

*1 主に淡水域で生活しており、淡水で生まれてすぐに海に下り、再び淡水域にもどるもの

*2 海岸において潮が満ち引きする範囲のこと

（黒住 耐二）